

京町家再生から私設公共空間の創造へ

西村 和代

1. はじめに

京都市の中心部には、京都らしさを象徴するような景観が多く残されている。なかでも京町家の続く町並みは、歴史的な景観として認められ、その保存や活用が進められてきた。しかし、取り壊される京町家は後を絶たない。建て替えを逃れ活用されているものの中には、モダンな改装を施され、もともとの京町家の風情を残さないものも多い。一方で、「京町家ブーム」と言われ、多くの人々の関心を集めているのも事実であろう。そうした「京町家ブーム」のなかでの活用には、一定の効果や価値があるところだが、本来の京町家の再生や保存と言えるのか疑問が残る。そこで本報告では、筆者が自ら行っている事例を取り上げ、京町家の再生を通して、地域に活力を与える担い手に着目し、「場所の力」(Hayden, 1995)を得て進める協働的实践(渥美, 2001)であることを述べる。

2. 京町家をめぐる現状から

京都での町家の現況調査は、研究者や専門家に加え、多くの市民によって行われてきた経緯がある。町家の調査や町並みの保全は、京都の持つ大きな魅力を継承していく活動として広く認識されてきた。また、2007年の新景観政策によって規制が見直され、行政もこの歴史的景観を保存し、継承していこうという方向に動きはじめている。京都市では、2008年から2010年に

かけて、京町家の減少に歯止めをかける具体的な施策の立案や、市民の取り組みの更なる推進等を図るため、京都市全域に残存する京町家等¹を調査対象とした「京町家まちづくり調査」²を行った。その調査では、2010年現在残存する京町家等が47,735軒確認されている。京町家は、京都の伝統的な建築様式や生活様式を伝え、現在も職住共存の暮らしの場であり、歴史都市・京都の景観の基盤を構成するといえる。しかし、現状では「集積する」といった歴史的景観は失われつつあり、事実、年間約2%の割合で失われているという調査結果から、その保全や活用策が喫緊の課題となっている。それでもなお都心部においては、多くの京町家が地域に残り、そこに暮らす多くの住民たちによって魅力は伝えられてきている。ただし、老朽化に伴う修理や修繕の費用が大きな負担となっており、相続や土地活用などの複雑な問題が加わって、その保存・維持・活用には、知恵を絞らなければならない。もとより京町家を「建築物」として捉えたとき、その伝統的建築手法の継承や地域の景観形成などが課題にあげられるが、一方で、私的な住居として現代の生活様式にあうよう居住性を重視して改装され、建て替えられていくことは致し方ない事とも捉えられる。筆者は、都心での職住分離が進み、生業の場としての役割を終えた京町家が、ビルやマンションに建て変わっていく様を見るに付け、京都らしい魅力ある美しさが失われていくと危惧していた。京町家は、建築物として地域固有の様式を持っている点や、さまざまな伝統の構法、職人の技な

¹ 昭和25年以前に伝統軸組構法により建築された木造家屋。

² 京都市、財団法人京都市景観・まちづくりセンター、立命館大学が実施主体となって2008年10月から行っている調査で、2010年8月に調査結果の概要が発表された。

どに、保全・再生の声も高まっていることは大いに期待できる。同時に、存続のためには税金や相続などの制度問題も複雑に絡み合う。しかし、住まいを代々引き継ぎつつ、現代的価値を見出し、まちに活かされていくことができれば、失われる危機を回避できるのではないだろうか。そうした考えと自らの事業を組み合わせた「私設公共空間の創造」を、ひとつの新しいモデルの提案にしていきたい。

3. 京町家再生に向けて

筆者が行ってきた京町家再生とは、前述した関心に加え、筆者を含む二人の大学院生³による社会起業⁴への第一歩であり、地域社会とつながる窓口となった。具体的には、京町家の魅力を活かした取り組みは、「賃借した空き町家を（中略）まちに活かされるよう多彩な仕組みと仕掛けを展開する実践的研究」（西村・山口，2009）でもあるのだ。

賃借した京町家は、京都市内では田の字地区⁵と呼ばれる市内中心部に位置し、伝統的建築によるもので、大正中期に建てられた築90余年の「家」である。もともと呉服関連の商家だった「家」は、筆者らが借り受けるまでの数年前から倉庫として使われていた。筆者らは、初めてその倉庫に入ったとき、どんよりとした空気なかに、工事現場用の蛍光灯が灯され、「家」の様相が全くないことに衝撃を覚えた。その京町家は、筆者らが想定していた物件のなかでも立地条件は申し分なく、加えて規模が大きく、もちろん家賃もそれなりに高額である。しかし、惹き付けられるその倉庫をなんとかしてでも「家」として蘇らせたい思いを強く持ってしまった。加えて、他にも賃借希望者が現れたことが後押しし、初めて訪れてから3日で契約申込をすることとなった。後押しされた理由は、「家」をどのように使うかという点であった。

ライバルとなる他の賃借希望者は、座敷（当時は畳が入っていない）に土足で上がるような計画である。少なくとも筆者らは、畳を入れて「家」に戻した利用を考えていた。どちらに貸すかは、所有者の判断に委ねられ、結果は筆者らが借り受けることに決まり、「家」としての再生が始まったのである。こうして倉庫だった京町家は、2009年5月「京町家 さいりん館 室町二条⁶（以下さいりん館）」と名付けられ、私設公共空間として産声をあげた。

4. 「京町家 さいりん館 室町二条」開設

「ここは何屋さんになるんですか？」と改修を始めた京町家を多くの人たちがのぞき込んでいく。のぞき込むその先では、学生らを中心に素人が自力での改修を行っていた。専門家に任せなかった理由は、そもそもの賃借条件が、2年という時限付であり居住不可のテナント契約であったことが大きい。よって資金投入の限界もあり、大がかりな改修工事をせずに再生させていく方法を検討することとなった。幸いなことに、築90年を越える物件であったが、柱や構造はしっかりしている。ただし内部には、天井、壁面に化粧合板が張り巡らされていた。当館を見た京都の町家再生に詳しい京都生活工芸館「無名舎」舎主の吉田孝次郎氏は、「洋館まがいの改造」「繕いの工事」と嘆いた。この発言後、吉田氏はさいりん館の再生に重要な関わりを持ち、さいりん館誕生のセンスメーカーとなった。吉田氏は朝に夕にバールを携えて来訪し、われわれに改修作業を指南しながら、町家に関する知識、自らの経験を伝授くださった。このようにして改修作業は、3週間という短い期間に多くの人の思いがつながり、多額の工事費をかけずに自分たちの力でやりぬく見通しが出てきた。こうした状況を発信しようと、吉田氏を招いての『トークセッション+町家再生達人教室・町

³ 筆者と同じく同志社大学総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コースに在籍する大学院生・三田果菜である。研究として行ってきた活動がベースとなり2009年に学生起業した。活動については、三田（2008）に詳しい。

⁴ 筆者も2009年にそれまでの活動をベースにして、環境教育、人材育成、まちづくりなどを主力事業とするカラージャパン株式会社を立ち上げた。

⁵ 歴史的地区ともいわれる京都の都心部を指す。大路小路が「田」の字型に交差している、丸太町通、河原町通、五条通、堀川通に囲まれた地域。

⁶ 名前は、協働して運営を行う二人にちなんで命名した。三田果菜の「菜」に筆者の華名「凜」をひらがなで用いることで、様々な意味合いに取れるように考えた。さらに名前から町家であることが一目でわかるようにし、さらに京都ならではの通り名を盛り込むという欲張ったものになっている。

家再生は「やっかい」やけど「おもしろい」！？人が集う、町家が「新しい公共」空間になる？』を開館前の2009年4月27日開催した。吉田氏は話の中で、「こうした町家の改装は1960年代（昭和30年代）に、冷暖房設備、車を入れるための車庫、部屋が明るくなればいい、少しでも過ごしやすくなればいいという戦後の洋風志向により行われ、それは誇り高いまちでありながら、戦前の勢いが失速したときに起こっている」と述べた。当館に関しては、複雑にいじっていないことが功を奏し、素人集団の手に負える物件であったといえる。加えて、化粧合板を外し、壁紙をはがしていく度に、呼吸していなかった家が呼吸を始めていく感覚は、「自分の手でやりとげたい」との思いが強くなっていった。このような町家を修復、復元していくことに補助金が出る制度がある。公的な資金も用意がなされてきているが、自費での改装をおこなっていることで、作業に参加してくださった方々も同時に「自分事」（西村・山口、2009）となっていったのである。

5. 地域での役割と人々の変化から

さいりん館は、筆者らが行ってきた実践的研究活動を行うための拠点を想定していた。しかし、多くの人々がそれぞれの関心を持ち寄り、訪れることができる場であることから、開設当初の想定をしていなかった事象が起こっている。



図1 京町家 さいりん館 室町二条

展示会や会議のスペースとしての利用を始め、習字教室、ヨガ教室、コンサート、お笑いライブ、落語会など、多彩な催しが開催されているほか、いつでも開いていて、そこには誰かがいる場として認識されはじめた。そして地域の方々に立ち寄っていただく「家」となっている。そもそもこうしたローカルな地域での公共空間創出への着想を得たのは、同志社大学の学外施設として設置された京町家キャンパス「江湖館」⁷である。江湖館において行った活動では、多分野の方々との信頼関係が構築されていった。そのような関係を活かし、さらに地域との関わりを深化させていくことを目指し、独自の手法をもって京町家再生を行い、地域に公共空間として開かれていったと考えている。

その一つに、月曜日に毎週開催している「朝ねぼう市」がある。販売するのは、農薬を使わず、無化学肥料で育てられた野菜が中心で、他にも手作りの漬物やジャム、はちみつ、米などが並ぶ。それはまさに、筆者が取り組んできた食育コミュニティを地域に広げていく仕掛けとなっている。特筆したいのは、その担い手である。筆者が企画者となっているが、運営は任せているのだ。任されているのは、さいりん館の棚を利用して小さなお店を開く女性であり、子どもを育てる母親でもある。彼女は、母親の視点を存分に活かし毎回工夫を凝らしながら、仕入れ値から売値を決め、販売する。お客さんには、調理法のアドバイスや、保存方法なども伝え、野菜の利用を促している。スーパーマーケッ



図2 朝ねぼう市

⁷ 「江湖館（こうこかん）」は、同志社大学大学院総合政策科学研究科が2006年のソーシャル・イノベーション研究コースの開設にあたり、オフキャンパスにおいて実践的な研究活動を行うための学外社会実験施設として設置した昭和初期の京町家である。ここでは、大学院の授業や研究会が行われる他、院生たちによる様々な実践的研究が行われている。詳しくは、西村（2009）を参照。

トと違い、少量販売の希望にも応えている点で、ひとり暮らしの方や少人数家族の方の利用も多い。現在では、安心して食べられる野菜の購入先として定着しつつあるといえる。

本報告では一部の紹介となったが、さいりん館の取り組みは多くの物語を有している。伝統的な京町家が持つ「場所の力」(Hayden,1995)が、地域や人々を動かしてきた。こうして、様々な人に支えられる場の創造は、さいりん館に惹かれた人々の関わりと交わりのなかから生み出されている。

「あなたたちでよかった。」突然やってきたよそ者に対して、近隣の住民の方々がこうした言葉をかけてくださることが大きな支えである。さいりん館は、時限付きでの賃借であるが、京町家の保存に向けて、活用法のモデルとしての提案を重ね、引き続き私設公共空間のあり方を模索していきたい。

<引用文献>

渥美公秀『ボランティアの知－実践としてのボランティア研究』大阪大学出版会、2001年。

京町家作事組編著『町家再生の創意と工夫』学芸出版社、2005年。

三田果菜「ネイルケアによる地域と女性のエンパワーメント：出町商店街での活動を通じて」『同志社政策科学研究』第10巻（第1号）、同志社大学大学院総合政策科学会、2008年。

西村和代「地域と研究者をつなぐ『江湖館オープンハウス』の取り組み」『同志社政策科学研究』第11巻（第1号）、同志社大学大学院総合政策科学会、2009年。

西村和代・山口洋典「私設公共空間による食育コミュニティの創造～京都・さいりん館でのデジジョン・メイキング（1）」グループ・ダイナミクス学会発表要旨、2009年。

西村和代・山口洋典「私設公共空間による食育コミュニティの創造～京都・さいりん館でのデジジョン・メイキング（2）」グループ・ダイナミクス学会発表要旨、2010年。

Diiores Hayden. The Power of Place: Urban Landscapes as Public History The MIT Press 1997 (後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎訳、『場所のカーパブリックヒストリーとしての都市景観』学芸出版社、2002年)

宗田好史『町家再生の論理－創造的まちづくりへの方途』学芸出版社、2009年。

<参考URL>

京都市・都市計画局 「京町家まちづくり調査」の調査結果の概要について（2010年）

<http://machi.hitomachi-kyoto.jp/doc/01tyosagaiyo.pdf>

京都市・都市計画局 京町家まちづくり調査の概要（1998年）

http://machi.hitomachi-kyoto.jp/kyomachiya_net/kekka/machiya_chousa-shukeikekka/dai1shou/chousa-gaiyou.htm